

赦された愛に生きる

この出来事には主の憐れみと、それによってもたらされる赦しの途方もない力強さがはっきりと示されています。この出来事は当時のユダヤ社会においては人々の価値観や常識をゆるがす驚くべき、というより恐るべきものでした。ここに登場する女性に作詞の能力があったならば、奴隷商人として生きてきたニューマンが人間の屑のようなわたしをも救われたイエス・キリストの驚くべき恵みをアメイジング・グレイスと讃えたように、そのたぐいの讃美が出来たでしょう。その代わりにこの婦人は主イエスの足を涙でぬらし、それをみずからの髪でぬぐい、キスをし、香油を塗るという大胆な感謝の応答をします。これはアメイジングで、ショッキングで、スキャンダラスな出来事でした。この行いに主イエスは応えられます。その結果、当時のユダヤ社会では非の打ち所のないファリサイ派のシモンという人物と罪深い女と書かれているおそらく娼婦であった女性の立場が逆転する。主イエスに対する振る舞いのゆえに世の中とはまったく逆の評価をくだされる。罪を赦されて主イエスの御前から去っていったのは、イエスを家に招いたホスト役のファリサイ派のシモンではなく、招かれざる客として突如やってきて、宴会の場の品位を損ない、皆の顰蹙を買うような振舞いをした娼婦であったという。彼女の振る舞いによって、かえってファリサイ派のシモンの愛のなさが暴かれてしまう衝撃の出来事をルカは伝えています。

この出来事はルカだけが伝えています。ルカ福音書がローマ帝国の高級官僚であったテオフィロに献呈されたことは有名です。最初に書かれた福音書マルコをベースにして、ルカはローマ帝国内のすべての人に向けて、ナザレのイエスがあらゆる

人々のための救い主であることを明らかにしようとした。ユダヤ人エリートであるファリサイ派のシモンが挫かれ、罪深い女が赦しを受ける逆転。あなたの信仰があなたを救った。安心してゆきなさい、と人生を再び生き抜く力と励ましが贈られる。ここに赦しの愛によって境界線を踏み越えてゆく主のアメイジングな恵みと、赦された愛によって立ち上がらされる女性の信仰のもつ力が浮かび上がります。

舞台は、ファリサイ派のシモンの家です。彼が、イエス様と話をしたいと願い、この場をセッティングしました。しかし、食事を含むもてなしの場にお呼ばれされた筈なのですが、のちのイエスさまの発言をみると、足をすすぐ水もくれなかった、接吻の挨拶もなかった、歓迎の思いを示すオリーブ油も塗ってくれなかったというホスト役としては失格と言わざるを得ない失礼な対応をしています。そういう意味ではやってきた罪深い女が、シモンに不足していたすべてをしてくるわけですね。ルカによれば、主イエスがファリサイ派の人の家に入って、食事の席についておられるのを知り、罪深い女が香油のはいった石膏のツボをもって入ってきた。そして後ろから、主イエスの足元に近寄り、涙でその足を濡らし、自分の髪の毛をほどいて主の足をぬぐい、主イエスの足に接吻をして、香油を塗ったのです。これがいかに常識から外れた行為であったかは説明が必要かもしれません。罪人から自分たちを分離することで「ファリサイ」と呼ばれた者の家に、町でも札付きの「罪深い女」が訪ねてくるということ自体がまず異常です。敷居が高いなんてものじゃない。出入りお断りという見えないバリアがあるような状態です。それを越えて、この女性はやってきた。その敷居を越えさせたのは自分の罪を赦してくださった主イエスへの感謝の応答、ひと言でいえば愛であったと言えるでしょう。この箇

所を見ますと、愛を原動力として踏み出す勇氣は、自分が受けた赦しや、愛や、感謝に対する共感能力に比例するのではないかと思えます。イエスさまは「この女が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさに分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない」と述べておられます。罪深い女は自分のふさわしくなさを鋭く自覚しています。自分には赦しが必要なことを知っている。負債の感覚というか、神さまに対して負い目がある。ここがのちにイエス様によって譬え話に出てくる借金 500 デナリオンと 50 デナリオン、日本円に換算すると 500 万円と 50 万円と思えばよいですが、彼女には返せない借金の自覚がある。生きる否応さのなかで積み重なり、みずからを縛り付けている負債がある。一方、シモンには借金の自覚、神さまに対して負い目があるとは思っていない。自分はよくやっていると考えている。そこがまさに問題なところで、このシモンの考え方や振る舞い、生き方は、わたしたちにも通じる場所があるはず。決してわたしと無関係な人物ではない。シモンは罪深い女と自分は違うと信じている。だから憤るし、そもそも罪深い女でなくても、女性が、こういう場にならずかと踏み込んでくることを許しているような社会でもない。それなのに、この女はやってきて、主イエスの足元に近寄り、涙で脚をぬらし、自分の髪の毛をほどいて主イエスの足をぬぐい始める。男性の足元に女性が来て、その脚に触るという行為には性的なもてなしに取られかねないことを学者が指摘しています。まして娼婦であったろうと言われる女性です。最後は主イエスの足にキスをして、香油を塗ったという。シモンを始め、居並ぶ客たちは、何をしているのだ、この町で札付きの女は。またこんな破廉恥な振舞いを許しているこの男は少なくとも預言者ではない。預言者なら、自分の足に触れているのが、どん

なたぐいの女であるか、分かるはずだ。シモンはそう思ったと言います。ここから分かるように、この「罪深い女を赦す」という出来事を中心は、ナザレのイエスとは何者かということです。シモンはこの女の素性も分からないようなイエスは預言者ではないと思いますが、主イエスは、女の事情も、シモンの心の中の思いも見抜いて、このあと彼を呼んで、借金を帳消しにしてもらったふたりの債務者の話をし、彼自身に考えさせ、答えさせ、彼が下した答えでシモンを裁く。そして「この男は預言者ではない。」という彼の思い違いを糺します。しかも、それだけではない。さらに主イエスは、この婦人の方に向き直って「婦人よ、あなたの罪は赦された。あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と無罪放免を告げるのです。ここで人々は罪までも赦す宣言をするこのナザレのイエスとは何者なのだろう。預言者にまさる存在が、ここに現れたのだということ認識せざるを得ない。ここは急所で、わたしたちの罪を赦すキリスト・イエスの権威がクローズアップされます。それは預言者を超えた働き、メシアの業です。ナザレのイエスの中に神の意志と神の霊が留まり、働いている。この罪深い女を赦すという出来事は、神による罪の赦しと祝福と平安がキリスト・イエスにあることを示し、同時にそれを受け止めるのは神の前に悔い改めによって砕かれた魂であり、それこそが信仰なのだということがはっきりと示された。罪人の自覚、聖書の言い方でいえば負債や負い目の自覚のない人は、シモンのようにお手盛りで自分を良しとしてしまう。自分の罪を認めず、自分の中にある良いものを数え、神との取引に用いて、自分の失敗や過ちをどんどん小さくしてお目こぼしを狙うのです。このやり方で巧妙なのは絶えず自分よりも出来ない人が持ち出され、その比較によって自分はよくやれている。あれよりもマシだという

操作に落ち着く。宗教改革者のマルティン・ルターはみずからの罪を小さくしよう、何でもないことのように思おうとするこの罪の縮小化を警戒し、逆に、自分の罪を主イエスの前に大きくすること、さらけ出すこと、みずからが神の前に、犯している罪を認識できないほど頑なで始末におえない罪人であることを積極的に受け入れ、この罪人の仲間に入ることで主の十字架の赦しの恵みに与ることを強調しました。イエスさまは医者が必要とするのは病人である。わたしが来たのは正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである、とおっしゃられました。わたしたちは自分が病人だとなかなか認めない者です。大丈夫だ、たいしたことはないと小さく考える。わたしたちの罪は生活習慣病のようなものです。聖書は、わたしたちは皆、わたしたちに様々なものを貸し与えてくださっている神さまの前に負債があると考えています。時間としての命を貸し与えてくださっている神さま、衣食住すべてにわたって配慮をしてくださる神さまに対して負い目がある。この負い目とは貸して頂いていることに対してではありません。神さまは気前の良い方です。問題は返済を正しくしていないこと、つまり、ふさわしい応答をしていないことなのです。自分がいかに多くを頂いているか、赦されているかを主イエスと出会って知ることが、わたしたちに、感謝の応答として生きる喜びと目的を与えるのです。それが信仰の力です。この女性が赦された愛に応えて生き始めたように、神さまはそのような変化を、愛によって生きる力を、主イエスと出会うことによって、わたしたちに備えてくださるのです。わたしのために十字架で命をささげ、今もとりなしておられる方のもとで、わたしの負い目がすべてあの方に担われ、赦されてしまったことを覚え、罪赦された罪人として、アメイジングな主の愛を褒め称え、喜ぶ生き方へと福音はわたしたち

を招いています。赦しの愛を知り、そこに賭けて生きる人格と人生に神の祝福が与えられる。福音書記者ルカは、この出来事を通して、神が罪人を心にかけて、愛し、赦してくださる方であること、躓いた者、崩折れた者を決して見捨てず、向かい合っ
て下さる主イエスの姿を伝えました。これらの消息から、わたしたちも感謝を学びたい。そして、赦された愛を生きる励ましと力を頂いて、日々、悔い改めの喜びを生きること、わたしたちを新しく生かす神のアメイジングな恵みを証する者とされたいと願っております。

お祈りいたします。